

知恵の樹

No. 153 2010. 10. 21

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野 3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

このままでよいのか！

後退の一途を辿る 都立図書館の協力貸出し

手嶋 孝典

協力貸出しとは？

都立図書館の協力貸出しという制度をご存知だろうか。それは、町田市立図書館で所蔵していない図書や雑誌を都立図書館から借用して利用者に貸出す制度であり、都道府県立図書館が市区町村立図書館に行う支援のうち、最も基本的なものとされている。2001年7月18日に文部科学大臣が告示した「公立図書館の設置及び運営上の望ましい基準」は、都道府県立図書館の「運営の基本」として「住民の需要を広域的かつ総合的に把握して資料及び情報を収集、整理、保存及び提供する立場から、市町村立図書館に対する援助に努める」としている。また、「市町村立図書館への援助」として「市町村立図書館の求めに応じて」、「資料の紹介、提供を行うこと」も規定している。

ところが、都立図書館の協力貸出しで借用した図書・雑誌のうち、刊行後30年を経過したもの、都立図書館が保全上の配慮が必要と認めるものは、市区町村立図書館の館内閲覧扱いとされ、個人貸出しが認められなくなってしまった。これらについては、東京都市町村立図書館長協議会（多摩地域の公立図書館長で構成されている協議体、以下「館長協議会」という）の反対を押し切って、昨年の4月から実施が強行されたからである。当初の計画は、借用図書・雑誌すべてが対象になっていたが、館長協議会が強く反対したため、かろうじて「刊行後30年以上」と「都立図書館が保全上の配慮が必要と認めるもの」が対象になったのである。

それ以外にも、館内閲覧どころか、協力貸出しの対象から外されている図書・雑誌が多くある。

なぜそうなってしまったのか

協力貸出し後退の経緯については、紙数の都合で詳しく書くことができないが、2002年1月23日に策定された「第一次都立図書館あり方検討委員会報告『今後の都立図書館のあり方』」に始まる一連の再編・合理化計画の一環である。2005年8月24日に策定された「第二次都立図書館あり方検討委員会報告『都立図書館改革の方向』」で「都民の課題解決のための情報サービス」に力を入れるために、「区市町村立図書館との役割分担の明確化を図」ることを謳っている。2006年8月24日に策定された「都立図書館改革の具体的方策」では、「相互貸借の促進」と称し、「都内区市町村立図書館間での相互貸借」に切り替えるために、「協力貸出方針の見直し」として、「資料の利用は、区市町村立図書館内での閲覧にとどめ、貸出期間（現行35日間）の見直しなどを行い、「雑誌の協力貸出対象範囲も見直し」すことを明らかにした。

この「方策」については、町田市立図書館協議会も反対し、2007年2月16日付で東京都の教育委員会委員長、教育委員会教育長、中央図書館長宛てに「都立図書館改革の具体的方策に関する要望について」（注1）を提出している。

町田市立図書館は、2009年5月に「都立図書館『協力貸出』の見直しによる影響について」（注2）をホームページに公表した。新たな状況

の展開を踏まえ、これまでの「都立図書館『協力貸し出し』の見直しによる影響について」(2004年6月23日付)と「都立図書館『協力貸し出し』の見直しによる影響について その2」(2007年7月1日付)をまとめたものである。

協力貸出しの実績

昨年度の町田市立図書館における都立図書館の協力貸出しの実績は、右の表のとおりである。

4月、5月は、都立図書館から借りた資料の内、館内閲覧の率が1割を超えていたが、6月以降は、急激に下がっている。館内閲覧を嫌って都立図書館以外の図書館から借りているか、借用を諦めてしまったかのいずれかであると思われる。

館内閲覧の場合、閲覧場所がない地域図書館、あるいは、場所はあるが夏休み等利用が増えた時の置き置き場所、閲覧場所に支障をきたすことが懸念されていたが、実際には館内閲覧の率が低いいため、それ程問題が顕在化していないようである。

その他、貸出延長をFAXで申し込まなければいけなくなったが、移動図書館で借用する場合はほとんど該当してしまう。以前はほとんどなかった延滞の連絡が来るようになった。読みきれない本を再度リクエストしていく利用者が増えた。

都立図書館の欺瞞

都立図書館は、その使命として「東京の未来を拓く力となる知の集積・発信」を掲げている。「経験豊富な職員と豊かな蔵書により、『時代のニーズにあったサービス』を提供することで、国際都市・東京を情報面から支え、都民や都政の抱える課題の解決を支援している」と自画自賛している(注3)。しかし、協力貸出しを後退させることが、都民が抱える「課題解決」に繋がるのかは大いに疑問である。都民が一番望んでいるのは、身近にある市区町村の図書館を通じて図書・雑誌を借りることであり、借りて読むことこそが多くの都民にとっての「課題解決」になっているはずだからである。

もっと都立図書館に対する声を！

前述した町田市立図書館のホームページを見た

都立図書館協力貸出しに関する調査(2009年度)

	都立全 借用冊数	館外 貸出し冊数	館内 閲覧冊数	館内 閲覧率
4月	234	206	28	11.97%
5月	417	373	44	10.55%
6月	414	398	16	3.86%
7月	365	341	24	6.58%
8月	294	278	16	5.44%
9月	435	413	22	5.06%
10月	293	277	16	5.46%
11月	380	351	29	7.63%
12月	248	221	27	10.89%
1月	379	355	24	6.33%
2月	351	337	14	3.99%
3月	407	385	22	5.41%
合計	4217	3935	282	6.69%

23区在住の方から、町田市立図書館長宛てに連絡があり、以後やり取りが続いているとのことである。ご本人の許可を得て私もそのやり取りを読ませていただいたが、その内容は、意見をきちんと聞く姿勢を持たず、説明責任を果たしていない都立図書館や一部の都内市区立図書館の対応への不信も含まれている。しかし、基本的には至極もつともな主張である。

協力貸出しを始めとする都立図書館の問題は、都内公立図書館の問題であると同時に、図書館利用者自身の問題である。市区町村立図書館としては、このような市民・区民の声を真摯に受け止め、館長協議会とも連携し、利用者と共に都立図書館の政策変更を迫る取り組みを始める必要がある。

(町田市立さるびあ図書館・会員)

注1 <http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/cul/cul08library/announce/toritukaikaku/index.html> [引用日:2010-10-14]

注2 <http://www.city.machida.tokyo.jp/shisetsu/cul/cul08library/announce/announce01/index.html> [引用日:2010-10-14]

注3 <http://www.library.metro.tokyo.jp/15/index2.html> [引用日:2010-10-14]

講演会「本が死ぬところ暴力が生まれる—子どもの発達と読書の関係—」

講師:杉本 卓 氏 (千葉工業大学教育センター教授)

去る8月 28 日(土) 14:00~17:00、町田市立中央図書館ホールにて、NO 法人まちだ語り手の会主催による表記の会が 64 名の参加者の下、催されました。この講演会は、図書館等の協力を得て、市内における公的機関での読書ボランティア調査をはじめ市内 5 箇所4回連続読書ボランティア基礎講座を開講するなどの事業の一環として行なわれたものです。講師の杉本氏は、『本が死ぬところ暴力が生まれる』(新曜社・1998 年)の訳者としても知られ、インターネットを利用した教育、電子メディア時代のことばとメディア教育に関わる諸問題、社会・文化・読み書きと学習・発達の関係などについて長年研究をされておられます。パソコン画面を参照に、『本が死ぬところ・・・』の内容解説や発刊後の検証も含めてお話くださいましたが、その大要を報告していただきました。(編)

初めに、守谷図書館長よりご挨拶を頂き、この講演会が、今年 11 月 30 日に 20 周年を迎える町田市立図書館の記念イベントを兼ねて行われること、町田市の第二次読書推進計画がスタートし市民との協働を期待していることが話された。次いで代表である増山から、まちだ語り手の会の紹介、この事業の概要について説明したあと、講演会の講師である杉本先生の紹介を挨拶として、講演が始まった。

電子書籍が話題になり、「本」というものの考え方が変わりつつある中で、「本とは何か」、「読書とは何か」を考えることが非常に大切である。「本」・「読書」・「言葉」とは何か？子どもが育っていくとき何が大事なのか？

「本」・「読書」とは？

「本」というのは、書かれたものが同じ形で残っていてくれる安定したメディアである。読む側はそれを見て、空想し、想像し、いろいろな世界を作っていくことができる。テレビの情報は向こうから来て、止まってはくれないので、自分で考えることがむずかしい。インターネットの情報もどんどん書き換えられて、以前にあった情報がなくなったりする。そういう意味で、本が安定して一ヶ所に止まってくれていることは大変意味がある。

「読書」は昔、集団で読むものだった。1人で黙って読むようになったのは日本では明治時代以降である。それ以前は「共同性」というものが読書の大き

な特徴の1つであった。声に出して読むということが当たり前の時代がずっと続いてきた。そういう意味で、読書は長い間、共同的な活動であった。

「言葉」とは？

私達は言葉がすごく便利でパワフルだと思い込んでいるが、実はよくわからないものである。「言葉でコミュニケーションできている」、「私が言うことが理解してもらえている」と思い込むのは幻想に近い。たとえば、「鳥」という言葉は知っているが、鳥というものを明確に定義することはむずかしい。言葉は、背後にたくさんの「経験」があって初めて成り立つものである。経験という大きな部分があって初めて言葉が意味を持つてくる。

「言葉」の起源

どうして人間は言葉を使うようになったのか？どうやって言葉を獲得したのか？

最近まで言葉の起源の研究はあまりなかった。人間の脳の進化などの研究を基にしながら、ここ 10、20 年ぐらい盛んに言語起源論の研究が出てきた。イギリスの研究者ロビン・ダンバーによれば、言葉は猿の毛づくろいから進化したものだという。人間が集団をうまく維持するために言葉が発達してきた。言葉は情報を伝えるためだけのものではなく、むしろ人と人との関わり合いを作ったり、維持したりするためのものであるという。たとえば、我々は「コミュニケーションする」というが、起源をたどると、ラテン語の「コモン」であり、「共通」、「共有」という意味である。もともとは何かを共有する、一緒にいるという意味を持っている。本を読んだり、言葉のやりとりをする中で、共同性・人との関わりということが非常に重要であることがわかる。

「オーラルな世界＝声の世界」の「物語」

声の世界は、口で話す言葉をベースとする。その中で一番特徴的なのは物語の世界である。始まり方、終わり方、3回の繰り返など、だいたい決まった型があり、物語独特の論理がある。話すときは声を出すこと自体すでに身体を使っており、身振り手振り、相槌を打つなど、声自体の抑揚やスピード等、いろいろな要素で身体全体を使っているという特徴がある。

語るときは聞き手も参加する。アイヌの人たちも、

相槌を打ったり、棒でコンコンと叩いたりして、一方的に話すのではなく、聞き手も一緒に参加しながら、お互いが関わりあって話が進んでいく。

また、文字を持たない世界では、民族の歴史や代々伝わる知恵などを語って伝えていく。自分の体験と切り離れたどこかのお話ではなく、体験と物語が深い意味で密接に関わっているのである。

「声の世界」と「文字の世界」の関係は？

人間の歴史を遡って考えると、500 万年くらい前は声の言葉しかなかった。文字ができたのは、約 5000 年ほど前。人類の歴史の終わりの 1000 分の 1 くらいがやっと文字を持った世界。本が庶民のものになったのは、だいたい 500 年前、1人で読む読書は 200 年ほど前から。情報技術では、1946 年、アメリカで最初のコンピュータができた。テレビも 100 年は経っていない。このように人間の歴史を考えると、声の世界があって、文字の世界ができ、その上に情報が生まれたと考えられる。

現在、メール・ブログ・ツイッターなど、情報テクノロジーを使ったコミュニケーションで文字をたくさん使っている。文字では相手と関わっても、声で面と向かって関われない若者が増えている。文字の世界が本来あるべき形ではなくなってきたのではないか。

声の文化では、語りが記憶の方法となる。知恵も、物語という形で、集団で記憶している。聞き手なしに何時間も語ることはできないし、聞き手の参加に促されて話をしていくというところがある。

場があって、集団がいて、そこでの語りで、知恵が記憶として残されたり、語り継がれたりする。

声の文化で記憶を助けるもう1つのものとしてリズムやバランスなどがある。ももとは語りと歌は区別がない。リズム・メロディに乗せて語ることで思い出し易くしている。韻を踏むことやテーマが繰り返されることも記憶することを助ける。

「声の世界」を回復させる重要性

情報の時代になって、文字の世界が危機を迎えている。本来文字の世界にある、自己概念、客観的な視点が情報の中で薄れてきているのではないか。読書離れし、テレビ・インターネット・ゲームなどにより、文字の世界が脅かされている。一番重要なのは、ただ本を読ませることではない。具体的な現実から切り離して文字だけで物事を知ると、身体とも切り離される。すると、ものを考えるときに身体感覚で判断するのではなく、ルールに過度に依存することとなる。

文字の世界を回復させるためには、文字の後ろにある声をしっかりと回復させなければならない。声の世界は身体—具体的な体験や、共同性・遊戯性

を伴う。物語の韻、言葉遊びなどのような遊びも大事である。このように、言葉の世界、文字のない世界をきちっと考えることが必要でなる。

今、子どもの読書・図書館を取り巻く課題

情報の世界がどんどん低年齢化しているが、体験する世界、物語の世界をどう確保するか、どう支えていくか。その中で本のある環境をどう作っていくのか。パソコンやテレビのほうが楽なのだから、本が特別なものであったり、自分から遠かったりすると、本には触れない。いかに本のある環境を当たり前のように作っていくかが今すごく重要な課題である。

また、乳幼児だけではなく、中学・高校生(ヤングアダルト)の最も多感な時期にどう本と関わるか、どんな本を読むかが大変重要である。小さいときに一生懸命読み聞かせしても中学になったら読まなくなるのではなく、中学・高校の時期の本も考えることが大切で、本と情報メディアとの関わりも考える必要がある。

また、本は共に読むことが大事である。録音した親の声を iPad で聞かせて読むのではなく、子どもと一緒にいて読むことで、そのときの子どもの反応や親の感じ方などで読むペースも、その時々で違ってくる。そうした一緒にいる体験をすることが大切である。

インターネットなどの情報時代の中、本当の知恵や文化の伝承とかといったものは非常に小さくなってしまっている。(『コンピュータを疑え』新曜社)体験を語り継いでいくこと、世代を超えたコミュニケーション・伝承をどういうふう守っていくかということも考えなければいけない。

読書活動・図書館は、言葉以前の世界と情報の世界の間であってそれらを結びつけ、よりよい社会を作っていく使命を持っているといえるのではないか。ゆったりした時間、自分を考える時間を持つことが、特に中学・高校のうちはとても大事である。退屈しているときに放っておくと自分でやることを見つける。自分で考える、何もしない時間が大事。ある意味、情報時代と逆行するが、こういう時代だからこそ大事にしたいことである。

講演後の質疑応答では、杉本先生ご自身の子育て体験も交えて、とても親しみやすくお話しくださいました。特に印象に残ったのは、子どもが安心できる大人との関係をきちっと持てる居場所を持つことが、キレない大人になるために大切だというお話でした。(まちだ語り手の会・市川美奈)

脇明子氏講演「物語が育てる人間的知性」を聞いて

成瀬台中学校図書指導員 水越 規容子

さる8月18日-19日に兵庫県の豊岡市城崎温泉にて「第42回全国子どもの本と児童文化講座」(日本子どもの本研究会主催)が開かれ、その初日の記念講演が表記の演題による脇明子氏(同志社大学教授)の講演だった。以下に簡単に報告したい。

子どもたちの現状

脇氏は大学のゼミなどで学生に日常的に接する中、今の子どもたちの育ちかたの問題について実例を交えて話された。ここ10年ほどの間に絵本の読み聞かせが盛んとなり、確かに学生も昔よりも読み聞かせをしてもらって育っている。がその一方、昔話は驚くほど知らない。小学校時代の読書体験を聞くときこう読んでいるようだが、内容は「怪傑ゾロリ」や「わかったさん」が圧倒的で、中学・高校時代の本離れが著しく、全然読まない多数と刺激的な本を多読した少数の両極に分かれているという現状分析だった。これは実際に中学校で生徒に接している中でも肯けることだ。

脇氏は読書自体を問題にするのではなく、しっかり生きていかれるように育つなら他の手段でも構わない、読書が絶対必要だとは思わないと断言する。今の風潮はやたらに本が読まれることだけを追求して、それは勢い貸出冊数の競争にいきかねない。さらに読書活動推進が後押しして、たくさん本を「読む」より「借りる」ことに子どもたちが追いやられる状況が一部にある。速読、多読についても警鐘をならしていた。子どもたちは煽らなくても多読に走りがちなので、冊数がいとも簡単に子どもの自尊心を満足させ、シリーズを全巻読破したというのが一種の達成感にもなるからだという。これは現場にいれば確かに感じることで、同じシリーズを次々と読むだけでなく、そのことをとても誇らしげに語る生徒が少なからずいることから納得できる。

メディア依存の問題

ほんの数年前には、ケータイやネットの弊害についてあまり心配する必要がなかったが、今その進行状況は凄まじい。学力低下、読解力低下問題、あるいは学級崩壊などもメディア依存の現状と深く結びついている。子どもたちの日常がテレビ・ビデオゲーム、ケータイ、ネットなどに侵食され、ヴァーチャルな空間に満足を得る傾向が強まっている。だが人が育つには実際に人と向き合い、感情や言葉のやり取りをする体験がとても重要なのだが、現在はそ

の大切な乳幼児期・子ども時代に音と光だけの一方的な刺激を集中的に浴び、十分に五感を使

わなないで育つ子どもが多い。脇氏はこれを「人間になり損なう」と強い言葉で表現した。これを踏まえないと、子どもたちの生きる力が弱体化している状況が正確に見えない。子どもたちが挫折や失敗が怖く新しい挑戦が苦手、人間関係能力が育っていないので問題解決の力がない、喜怒哀楽が乏しく、物事への興味・意欲が弱いのに、刺激的なものや泣けるものを好み、思考力や判断力に乏しく、さらに表と裏の分裂があると特徴づけた。しかしその一方、力のある物語との出会いで驚くほど育つ学生の例も多く挙げた。たとえば、カニグズバーグの『エリコの丘から』やサトクリフの『第九軍団のワシ』、トールキン『指輪物語』などに会った学生の成長だ。反対に「ダレン・シャン」や「ハリー・ポッター」に魅力を感じていた学生が丁寧に読み込むことで、その物語の矛盾や質の低さに気づくことも報告していた。すばらしい作品は、自然に人を育ててくれるものだという言葉には同感できる。

力のある本にどう出会わせるか

しかし子どもたちが力のある本に出会うチャンスは極めて少なく、原因の一つが多読と速読への強い思い込みで、驚いたことに「読むのが遅いため、朝読書の時間が苦痛だった」と言う多くの学生を報告した。またよく言われる「ジャケ買い」(表紙絵だけで本を選ぶ)、さらに学校図書館での新刊だけの紹介も槍玉に。本離れた子どもたちに漫画でも何でもいい、とにかく手に取ってもらおうとグレードを落とす、結果中身が薄くビジュアルで刺激的な内容へどんどん転げ落ちていく。読めないからと幼すぎて手応えのないものを渡し、やっぱり面白くないと悪循環が起こっている。読書ボランティアが盛んになって絵本の読み聞かせを学校などですることはいいいのだが、限られた回数だとしてもその場限りで子どもを楽しませられる絵本などを選びがちで、先へと繋がらないと危惧を示した。

生きる力がしっかりと身につくには人間関係と多様な生活体験が重要で、人間関係や生活体験が十分でない現在の環境を補うものとして本の重要性を強調。体験の幅を広げ、視野を広げる力、自分の体験を整理し消化し反芻し、知恵に変えていく力を挙げた。そこで生きる力を育ててくれる本として、想像力を使って楽しめる作品、読みやすいよりむしろ思考力を使って楽しめる作品をあげ、そ

れらを大人がしっかりと選んで手渡すことの必然性を話した。これは重要だと私も考える。子どもと本の橋渡しに位置する「人」の問題がなおざりにされている現状は、極めて問題だ。

では何をすればいいか

子どもたちがいい作品に出会える可能性が少なく、しかも読む力の基盤となる物語体験が極端に不足していることから、朗読をすすめる。家庭でなら長編の朗読も少しずつできるし、学校で先生が朝の時間などを使って少しずつ読むと、子どもはたとえ週2回でもしっかり物語についてくる。自分では手にとらないいい作品に出会えるし、続きを待っている間にいろいろ想像力や思考力を働かせ、そしてなにより、友だちとお話を共有することで話題や遊びが豊かになるメリットは大きい。さらに親子で物語の楽しみを共有することで会話が豊かになり、メディア漬け状態を脱する糸口になるし、物語を実体験につなげていくこともできる。学校での本の紹介にも、一部朗読を交えてじっくりと一冊の本を紹介することを奨励して話を締めくくった。

話を聞いて(また事前に示された参考図書すべて読んで)子どもたちがリアルな実体験のないままにヴァーチャルな世界に取り込まれていく危険性を痛感したが、一方で資料に挙げられたある中学校での「推薦図書」には疑問を感じた。それは3段階のグレードに分けて20冊ぐらいずつを列記したものだが、なんとそのほとんどが福音館と岩波書店の出版。冒頭のサトクリフも5冊ほど入っていて、サトクリフを推薦することになんらの異論もないが、同じ作家の作品を多数入れるよりも別の作家の作品を入れる方が「多様な読書体験」を保障するのではないだろうか。マーヒーやカニグズバーグもそれぞれ4・5冊含まれ、選書に偏りがあると思わざるを得ない。この3人に比肩する作家がいないのかといえば、そんなことはない。たとえばアーモンドはどうか、ドナ・ジョー・ナポリは？いずれにせよ子ども時代の豊かな読書を保障する学校図書館が、どのような本をどのように提供していくのか、真剣に考え論議し、かつ実践していくことが求められると感じた。(会員)

第31回東京『読書の学校』に参加して

童話の話とアニメーション実演

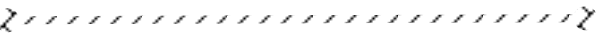
町田市役所 石井 一郎

去る8月19日、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、東京『読書の学校』主催の表記の会が開催された。第1部では、石川文子さんより過去40年間で国語教科書に掲載された童話の話があった。第2部では、杉並区立神明中学校の伊藤美佐子先生のアニメーションを行った。

石川文子さんは、教科書会社を勤務した後、フロネーシス桜蔭社を起こされた。国語教科書に掲載された童話を編集し『おとなを休もう』『くじらぐもからチックタックまで』を出版された。

講演では、出版された本についての話を中心に語られた。最初に、茂木健一郎の著書で知った「セレンディピティ」の言葉について話された。『セレンディップの3人の王子たち』の物語が語源となったセレンディピティは偶然とオチによって探していないもので出会うこと、またその能力のことをいう言葉。児童文学にはセレンディピティのように偶然の幸せに出会えることが多いと話され、受講者に読書体験を尋ねた。受講生の体験話のあとで本題に入った。

石川さんが『おとなを休もう』を出版されたのは、2003年のゆとり教育により、国語教科書から童話



の掲載が3割減ったことに驚いてだった。石川さん自身、教科書に掲載された童話を楽しみにしていた体験から、掲載作品を広く知ってほしいという願いからだ。教科書に掲載される作品の選択基準はなかったため、まずデータを集めることをされた。昭和40年から平成14年改訂までの小学校3、4年生の全教科書を読み、採用回数のカウントを行った。採用頻度の高かった作品ベスト28作品を割り出し、ベスト作品と他に味わい深い作品を編集したのが『おとなも休もう』。小学校1、2年生の教科書の掲載作品を編集したのが『くじらぐもからチックタックまで』。

出版の経緯のあとで、1、2年生の教科書と3、4年生の教科書と5、6年生の教科書の採用頻度の高かったベスト10を受講生全員があてる形式で話が続いた。1、2年生の1位は『おおきなかぶ』、3、4年生の1位は『ごんぎつね』、5、6年生の1位は『大造じいさんとがん』。ベスト作品にまつわる話は面白かった。『おおきなかぶ』は、日本の絵本は白いかぶ、ロシアは黄色いかぶだとか、読者のリクエストの多い作品の紹介があった。石川さんの作品に対する熱い思いが伝わる講演だった。

第2部では、伊藤先生が中学でやられたアニメーションを実演してもらった。受講生が班を作り、班員全員で絵本の絵から童話の一場面を探し、代

表者が作品のあらすじと場面の発表を行うというもの。教材には安野光雅の『旅の絵本Ⅰ』と『旅の絵本Ⅱ』を使った。班は7,8名の人数で行った。講師が絵本からカラーコピーした用紙を各班に配った。ヒントとして、部屋の前に本が置かれており、各班に物語の一部を書いた一覧表があった。私の班は、『旅の絵本Ⅰ』の表紙が割り当てられた。扉にペンキを塗っている絵から『トムソーヤの冒険』と甲冑を着て馬に乗っている絵から『ドンキホーテ』が

見つかった。発表は3人一組で行われた。一人がホワイトボードに貼られた題名のボードを見せる。一人が配られた絵を持ち、見つけた場所を指差す。一人が、班の見つけた箇所と題名とあらすじを発表する役割。班の発表では、『ドンキホーテ』のあらすじをした。各班の発表のあと、講師からの講評と解説で終了した。

はじめてのアニメーションで面白かった。別のアニメーションも体験したくなった。(会員)

—まちの図書館、いなかの図書館 2—

知的障がい者雇用について

玉目 哲廉

本会報の前号で鈴木薫さんが、「公共図書館における知的障害者へのサービス」を書かれていましたので、1つの経験を公共図書館側にいた者として紹介したい。

前号で私は、大津町にある学校を紹介したが、その他に、小学校から高校の年齢の子たちが通っている県立大津養護学校がある。高等部の生徒は2年になると、将来職業に就くため事業所等に6月と11月の2回、各3週間の実習に出ている。

おおづ図書館が開館した平成15年の9月頃、養護学校の先生から「図書館での実習を希望している女生徒がいる。本が好きで、身の回りのことは人の助けを借りないで出来る子だ。実習の時間は9時から3時頃までで、是非お願いしたい」との依頼があった。

その頃の図書館には、寄贈されていた本が書庫にたくさんあり、文庫本の透明カバーかけなら教える出来るのではないかと考え、引き受けた。

こうして11月には、その子が図書館に実習に通ってきた。彼女はバスで通学していて、家と学校の間に図書館に近いバス停があったことも幸いであった。

カバーかけはなんかいも何回も同じことを教えながらのお互いに根気のいる仕事であった。このようにして最初の実習が終わり、3年になり、5月に養護学校から再び依頼があり、引き受け、9月にも依頼があり、引き受けた。

12月になると、養護学校から図書館での雇用を打診された。そうなる図書館だけでは手に負えないので、総務課の人事担当に相談をした。図書館では彼女が出来る仕事があることを説明した。すると人事担当は、役場は慈善団体ではないので、雇

うことは出来ないと言うつれない返事だった。養護学校では、教頭先生が町長と話しをする機会があったらしく、直接町長にも要望をしていた。私は、町長に呼ばれ状況を聞かれた。

町長は、雇うなら3年間は雇いなさいということでした。

雇用するための臨時職員としての予算も認められ、平成17年4月、火曜日から金曜日の週4日、9時から3時までの勤務時間で、賃金は県の最低賃金を適用するというでスタートした。

本人にとっては、実習の時と同じ時間での勤務でよかったと思うし、図書館でもその位が適当な時間であった。彼女が図書館で働いていることは、時々本の配架なども手伝わせていたので、利用している町民で知っている人もいた。

ある時、行政に対する要望のアンケートが実施されたことがあり、その中に「知的障害のある人を雇っているこのような町に住んでいることを誇りに思います」と書いてくれた人がいた。

こうして、彼女は図書館で成人し、3年が過ぎ、4年目に入る時に、町が障害者を公募で募集することが決まり、図書館も公募にしてはどうかという話があった。公募するには間に合わないし、公募自体に馴染まないのではないかと人事担当には話しをした。4年目の12月頃に彼女の家が熊本市内に引越しをし、継続して雇用していくのが難しくなり、3月で図書館での勤務は終了した。本のカバーかけだけでなく、廃棄図書へのゴム印押しとか単純な雑用もしてもらった。何もなくなると児童図書の配架などをしてもらうなど出来ることを増やそうという試みもした。

彼女がいた期間は、他の職員にとっては大変であったかもしれないが、出来ることをやってもらっていて、職員の彼女を思いやる気持ちを育てていたようだ。

その後、図書館では公募で障害者は雇用しなかった。(会員)



本を読もう！

ひろば

<例会報告>

9/15(水)18:00-20:00

中央図書館中集会室
会報 152 号印刷(16:00~)
伊藤、丸岡、増山

出席者:石井、伊藤、近藤、齋川、鈴木、
玉目、手嶋、増山、丸岡、水越、守谷

- 忠生市民センターの建替えにあたり、図書館機能を含む複合施設建設(4000 m²予定)について、市民の意見を聞くワークショップが開かれているが、新たに建替基本計画検討委員会が設置され、今年度中に基本計画が策定される見通し。構成メンバーの1名としてセンター利用者でもあるまちだ語り手の会の会員を推薦している／複合施設は 2014 年にオープン予定で、今年度は基本計画のみ／1000 m²ぐらいの図書館構想がある？／新鶴川は来年1月に工事がスタートする予定。
- 中央図書館 20 周年記念の図書館まつりエンディングとして、「町田市立図書館のこれからを話し合う会＋交流会」をしてはどうか。参加団体は積極的に、一般市民も呼び込む。実行委員会主催でタイトルは「みんなで語ろう、これからの町田の図書館」／次回実行委員会(9/28・火)に提案する／11/11 の広報一面で、図書館まつりの日程を掲載。
- かえで文庫 30 周年の冊子を、70 部作成。9/11(土)成瀬センターホールにて、ひろかわさえこ氏の講演

町田の学校図書館を考える会 (定例会報告)

9(土)10:30~12:00/中央公民館6階フリースペース
(出席者:清水・谷釜・伴・水越・市川)

●「子どもと図書館 連続講座」<図書館共催>

◇第1回:10月30日(土)14:00~16:00

中央図書館中集会室

『子どもに本を手渡す一読み聞かせ・パネルシアター 他』

講師:図書館職員、柿の木文庫のみなさん

◇第2回:11月28日(日) 図書館まつりの講演会

講師:丸山英子さん(狛江市立小学校司書)

◇第3回:1月22日(土)の予定で講師と会場を交渉

『レファレンスについて』(仮題)

講師:上平操先生(会員)

◇第4回は2月末か3月上旬に予定。

鎌田和宏先生(帝京大学准教授)に講演を依頼。

●教育部長との面談について

11月4日(木)9:30~

●学校図書館見学について

*次回定例会は 11/13 日(土)10:30~公民館6階

2010年度 第8回 文学館(主催)で楽しむ

おとなのためのおはなし会

11月18日(木)10:30~11:30

町田市民文学館 2F大会議室

プログラム

- * 町田ゆかりの作家「小林清之介」 砂川とき江
 - * 茶色の髪若者の昔話(アイルランドの昔話) 梅谷信子
 - * 頭の大きな男のはなし(遠野民話) 佐々木令子
 - * 牝牛の絹毛(ケルト民話) 増山正子
- 直接会場へどうぞ! 語り:まちだ語り手の会



会を実施、約 50 人参加。成瀬センター建替えの話も出ている。

- 藤沢の辻堂図書館の委託問題で、受け皿としての NPO を立ち上げた。
- 今年度初めて、町田市の新任教諭 79 名を対象にした着任研修の中で図書館利用ガイダンスを実施。初めて図書館をじっくり見たという声もあり、好評だった／町田の図書館は、教員の利用も視野に入れて資料を収集している／先生は多忙のせいか、意外に図書館を利用していない。こんな本はないだろうと、あてにされていない面もある。一歩踏み込んで利用してもらうための、PR も必要。
- 他の自治体では大口の寄付が話題になっている／議会質問で雑誌スポンサー制度の提案もあり、図書館は何らかの検討をせねばならない。

お知らせ

◆第25回のづた丘の上秋まつり／11/3(祝)
10:00~15:30 [雨天は7日(日)]/会場:野津田公園ヤマナラン広場/市内で自然や文化活動をしている19の団体が丘の上の広場に集い、模擬店・展示・おはなし会・歌ったり踊ったりして秋の一日のんびりと遊ぶ恒例のお祭り/主催:野津田雑木林の会 (問: ☎045-961-5045 久保)

◆図書館フォーラムかわさき 2010/第13回図書館を考える市民、職員、教職員の集い／11/13(土) 13:00~16:30/エポックなかはら(川崎市総合福祉センター)/基調講演「子ども読書年から10年をふり返って」講師:肥田美代子氏/パネルディスカッション「読書が広げる可能性 ~ボランティア、学校の活動報告から~」(パネリストは、「読書のまち・かわさき」事業推進協議会会長、小学校、学校図書館コーディネーター)500円/問い・申込:実行委員会事務局(小林 09015309795)、kawa_lib@yahoo.co.jp やっと夏が終わった! 部屋の改修で収納場所から出さざるを得なかった物の多さに驚いている。捨てても誰も拾わないようなくず物ばかりだ。頭の中も整理して、秋の夜長、読書を楽しもう!(M⁴)